

北山杉と磨き砂

かくもと たけあき
福本武明*

京都駅から国鉄バスで約45分ほど行くと、清滝川沿いの山の斜面に北山杉の美林が見えてくる。川端康成の「古都」にも登場するこの北山杉は、昭和41年制定の「京都府の木」でもある。ここ中川北山町を中心とする地域一帯は、昔から杉の磨き丸太の生産を目的とする林業が盛んなところで、西陣織・京友禅・清水焼などとともに京都の伝統産業の一つとして知られている。

磨き丸太は、座敷の床柱、けた、軒下の垂木などに使用される。磨かれた木肌の美しさは、特に我が国の伝統的な数寄屋と呼ばれる建築様式に生かされ、桂離宮や大徳寺の茶室など北山丸太を使った古建造物が、各地に数多く残されているという。車窓から、今でも町並みのあちこちで丸太磨きの作業風景が見受けられる。磨き作業は、女性の手で砂を使って丹念に行われるようである。値段はピンからキリまであって、天然しぼ（木肌表面のしわが天然）の丸太なら1本が数百万円もするものがあるそうだ。筆者は、値段よりも磨き砂に興味をもった。

磨き砂は、近くの菩提の滝から取れる川砂で、上流の山から花崗岩の風化したものが流下して滝つぼにたまったものだという。これで磨くと木肌に傷がつかないばかりか何ともいえない美しい光沢がでる、というのである。実際に女性が水と砂のついた生の木肌を、素手で優しくなでるような格好で磨いて見せてくれた。図-1は、2箇所（A, B）からもらった磨き砂の粒径分布を調べた結果である。図から明らかなように、これらは最大粒径が大体3mm程度、50%径が0.5mmくらいで、細粒分を4.3%ほど含む砂であり、日本統一土質分類法では、粒度の悪いきれいな砂（SP）に該当する。粒子は軟質なものだけでなく硬質なものも適度に混在しているようである。図中のA'は、新鮮な磨き砂Aを用いて何回か磨いた後の粒径分布であって、使うと細粒化することを示している。仕舞には粉のようになってしまいが、そうなればもう磨きの効果は期待できないという。なお、土粒子比重の測定結果は2.69であった。

*立命館大学教授 理工学部土木工学科

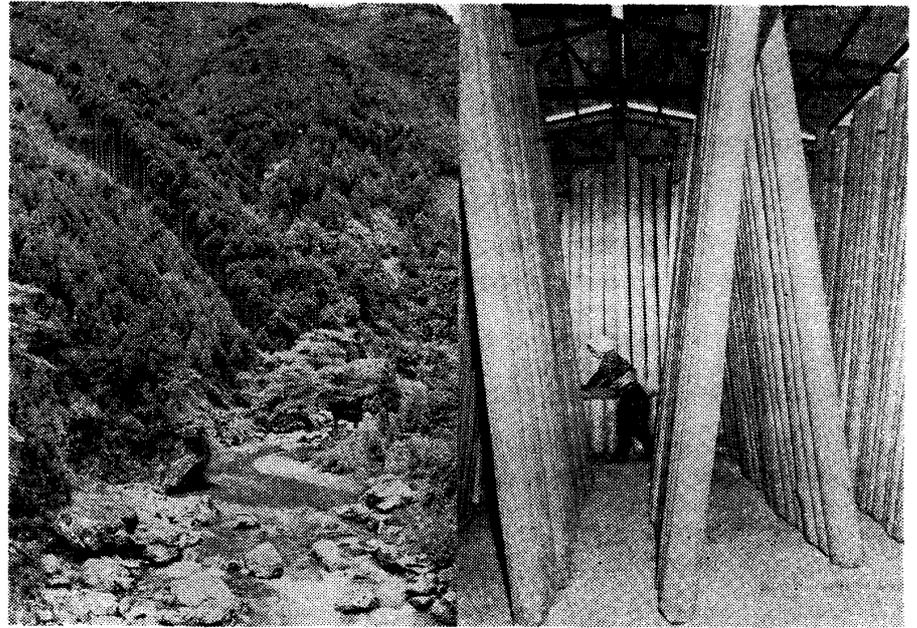


写真-1 北山杉の美林（左），磨き丸太（右）—市販の絵葉書より

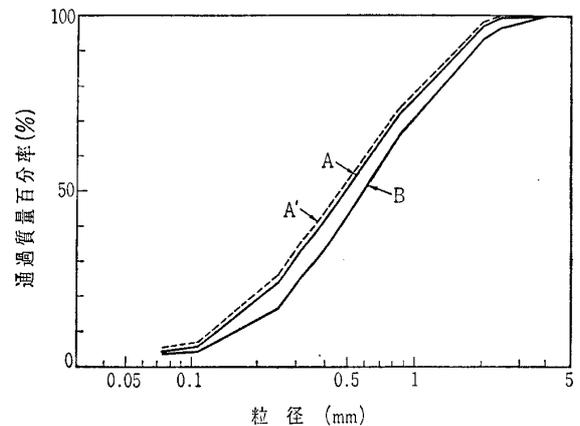


図-1 磨き砂の粒径加積曲線

金属などの研磨用には、例えば珪砂のように粒子の硬いものが用いられる。それに対し、磨く対象が柔らかい木肌のような場合には、それ相応の軟質な粒子から成る磨き砂が必要となる。磨き丸太の手を止めて老女が言った、“昔はこの砂で、木製の飯びつや弁当箱などもよく磨いたものだ”と。これも皆、この地方の人達の古くからの生活の知恵なのであろう。銘木の里は今、人手不足も反映してか砂の代わりに薬品を使い機械で磨く作業場が多くなったと聞く。
(原稿受理 1982.9.29)